

日本映画史の塗り替え に取り組む ローランド・ドメーニグさん

Roland Domenig

ウィーン大学東アジア研究所准教授



ローランド・ドメーニグ●専攻は映画史、日本研究。著書にカタログ『Art Theater Guild』。ATG特集をウィーン映画祭で手がけるなど、映画祭のキュレーターとしても活躍。北野武、宮崎駿、新人の自主映画などの字幕翻訳も行う。2008～09年、国際交流基金（ジャパンファウンデーション）フェローとして来日

撮影：高木あつ子

日

本映画史を研究するドメーニグさんの話を聞いたのは、彼の住む東京都新宿区荒木町に

近い店、牛タン定食を食べながらだった。箸を器用に使い、荒木町の魅力について語り（おいしいお店を一軒ずつ制覇したそうだが、「梅しそたたき」が好物だと言いつつ、そして日本との関わりを語ってくれた。

「日本との出会いはまったくの偶然だった。大学に入学したときに、どこか遠い国の言葉を知りたいと思って、たまたま日本語を選択した。ただ、勉強すればするほど、日本に引き込まれた。日本に呼ばれたんだね」

日本の高齢化や労働についての研究から始まり、1990年代から労働の対極にある「娯楽」に焦点をあてるようになった。宝塚の戦前・戦後の変遷を通して、日本社会の移り変わりを研究するうちに、自然に映画にたどり着いたという。

はじめて日本に長期滞在した91年。日本人の友人たちは、見てもいない日本映画をつまらないと言いつつ、その声をふりきって、自分の感覚で確かめようと、映画の世界に踏み込んでみると、若手監督の作品が持つ圧倒的な力に衝撃を受けた。まだ人々が映画監督として認めようとしなかった時期の北野武。それに、塚本晋也、阪本順治。自主映画のおもしろさにはまって調

べていくうちに、ATG（日本アート・シネマ・ギルド）にたどり着き、60年代の新宿文化と映画の研究に没頭した。

現在、取り組んでいるのは、「日本の映画史を塗り替えること」だと笑う。従来の日本映画史は、19世紀後半に欧米から機材が輸入されたことに始まるとされているが、ドメーニグさんは「それ以前の幻灯や写し絵などから始まった」と言う。江戸時代からの流れと、欧米からの影響も含めて、それを連続性のある「スクリーン・プラクティス（映写文化活動）」としてとらえ直すことを提案している。

そして、映画だけでなく、日本文化の持つ過去からの「連続性」と「輸入」の影響。この入り乱れた複雑な関係から見えてくる日本の近代化を考えていくそうだ。

そんな彼の日本を見る目は、あらゆる領域に及ぶ。91年の日本滞在時の話、最初の6カ月（ハブル末期）は雑誌を見ると、高級イタリアンやフレンチのフルコースの案内ばかり。バブルがはじけた途端、もつ鍋やホルモン焼きに人気が移ったという。後者が好きだから、今でも鮮明に覚えているに違いない。

日本人もウィーン人も「曖昧」な表現をするから、日本での生活にも「違和感はない」とニヤリと笑った。☺